●巻頭エッセイ　MOOCという新種の「学び」が拓くもの 1
●第2回「英語の教え方教室」合宿・勉強会 in 長浜報告 2
・基調講演 2
・グループ討論①、グループ討論② 3
●授業の玉手箱 4
●書籍紹介 『日本人に相応しい英語教育』 4
●第 30 回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告 4
●第 32・33 回勉強会「英語の教え方教室」の予定 4

巻頭エッセイ　MOOCという新種の「学び」が拓くもの

東條　加寿子

“ムーク”というのは怪物の名前のようにも聞こえる。今、未知の「学び」の仕組み“ムーク“が、世界で広がりつつある。ムーク（MOOC）とは何か、従来の「学び」の仕組みとどう違うのか。MOOCというボーダレスな教育を手掛かりに、次世代の「学び」について考えてみたいと思う。

MOOCとは Massive Open Online Course の略語で大規模公開オンライン講座のことを指し、2012 年にアメリカでスタートした。通常、数週間で学べるコースにオンライン登録し、オンラインで授業を受講しながら、課題や試験に取り組み、合格すれば修了証を取得することができるという新しい大学教育の仕組みである。受講は無料で、現在世界中で約 1000 万人がMOOCで学んでいるといわれる。登録のために国籍や職業や年齢が問われることはなく、モンゴルの 16 歳の少年がMIT (Massachusetts Institute of Technology) の機械系の講座を受講し、試験を満点で修了、現在MITの正規学生になっている事例は有名である。MOOC誕生の背景には、遠隔授業とOCW (Open Courseware) の流れがあるといってよい。遠隔授業は時空の制約を克服した教育の配信を実現し、2002 年にMITが着手したことに始まるOCWは、講義の動画配信をはじめ講義シラバスや課題・試験に至るまで、大学教育コンテンツを一気に世界に向けてオープンにした。現在、MOOCは Coursera と呼ばれる Stanford 大学など 100 以上の大学（講座数約 650）が参加するものと、edX と呼ばれるMITや Harvard 大学など約 30 大学（講座数約 150）が参加するものに 2 大別される。日本の大学の参加状況は、東京大学が Coursera で 2 科目を開講、2014 年から京都大学が edX で講座を開講している。日本の最新の動きとしては、JMOOCが設立され、国内の大学の参加を呼び掛けている。Coursera や edX などの global MOOCに対して、JMOOCは regional MOOC に分類される。講義言語としての日本語の特性を考えれば、JMOOCの存在意義は想像に難くない。

さて、MOOCから私たちはオンラインの個別学習による「学び」のスタイルを思い描くが、実はそうではない。MOOCではオンラインで学習コミュニティが形成され、受講生同士の交流が促進されるという。このことは、今や日常的なソーシャルネットワークによるコミュニティ形成過程と同様であり、講座によっては、meet up と呼ばれる“どこかに集まる授業”も企画される場合があるそうだ。そして、こういった学習コミュニティの形成は、学習者のモティベーションを高め、コース修了まで学習を継続させるのに重要な役割を担っているという。学習コミュニティの形成の観点から、MOOCにおける評価の仕組みはさらに興味深い。1 講座を何万人もの学習者が受講することを考えれば、課題や試験の評価を講義担当教員一人が行うことは現実的に不可能であり、通常、受講生を巻き込んだ相互評価（ピア評価）が行われる。受講生は自分の課題を提出すると同時に、例えば 5 人の課題を評価することが義務付けられる、といった具合だ。講義担当者からルーブリックと呼ばれる評価の観点や評価の基準を書いた表が示されるので、受講生は講義内容を正しく理解した上でルーブリックに基づいて他の受講者の課題を評価することになる。評価し、評価される。議論が深化し、共に学ぶ学習コミュニティが形成される。

ここまでMOOCの「学び」を概観してきたが、この全く新しいオープンでバーチャルな高等教育の仕組みは、私たち一人ひとりにとってどのような意味を持つのだろうか。学習者という立場からは、MOOCは自分の意志で参加可能な夢のような学びの場である。自分の学びたいことを世界の一流の講座群から選択し、主体的に学びを進めることができる。社会人になっても学び続けることができるし、特に専門性の高い職業分野においては、知識を最新化することができる魅力的な学びの機会である。また、年齢を問わず才能のある学習者は主体的に高度の学びに挑戦することができるし、国内でJMOOCが一般化すれば、大学選びや学部（専門領域）選択に活用することができ、大学入試改革の一翼を担うことができるかもしれない。MOOCで講義を公開する大学の立場からは、MOOCによって得られるビッグデータは文字通りの“宝の山”と言われている。どのような専門領域のどのような科目をどのような学習者が受講しているのか。受講生数が万単位であれば、これらのデータから得られる情報の活用法は計り知れない。

そして、中等教育に関わっている私たちにとっては、MOOCの「学び」の仕組みが、現在、私たちの教育の現場で進められている新しい「学び」の仕組みづくりと同期していることが最も関心のあるところである。授業内容に関するビデオは予習で義務付け、授業ではその内容に基づいた協働学習やプロジェクト学習に重点を置くいわゆる反転授業 (flipped classroom) は、MOOCと多くの共通点を持っている。学ぶ側に授業の主体を移し、協働して、アクティブに学ぶ。知識を提供するための授業から、学習者が主体的に関わる授業へのシフトである。

マルティメディアコンテンツの配信、ソーシャルネットワーク（SNS）の日常化などのIT技術革新が席巻する社会で、学習コミュニティの形成、協働学習、学習者主体の学び、アクティブラーニングという時代の価値観をまとった「学び」のパラダイムが形成されようとしている。“ムーク”は異次元の怪物ではないことは確かなようだ。